

# 11 課

6月15日

## 差し迫った争い



安息日午後 6月8日

### 暗唱聖句

真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。  
(ヨハネ 17:17、新共同訳)

真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。(ヨハネ 17:17、口語訳)

### 今週の聖句

黙示録 14:7、9、12、黙示録 4:11、黙示録 13:1、2、黙示録 12:3~5、17、  
黙示録 13:11~18

### 今週のテーマ

バイオチップとかベリチップと呼ばれる、患者の皮下に埋め込むことができる米粒大の比較的新しい医療機器があります。このバイオチップには患者の病歴に関する情報が含まれており、チップが埋め込まれている部分を外部スキャナーで読み取ることによって、情報が得られます。クリスチャンの中には、これを獣の刻印を強制する陰謀の一環と見なしている人がいます。また、獣の刻印は缶詰のバーコードと関係していると考える人もいれば、ドル紙幣に記載されている、合計すると666になる謎の数字が獣の刻印だと考える人もいます。友愛結社フリーメーソン、秘密結社イルミナティ、国連の黒いヘリコプター、国連そのものと関係づける人もいます。

今週の研究の目的は、礼拝をめぐる今後の争いを明らかにすることです。サタンは神の律法を無効にしようとして、神の権威に挑戦します。具体的には、安息日が礼拝をめぐる世界的な争いの中心になるでしょう。サタンが安息日を嫌うのは、創造主を憎んでいるからです。サタンは、強制、圧力、暴力を用いて、キリストに対する私たちの誓いを破らせるでしょう。真の礼拝日と偽りの礼拝日めぐって、信仰の衝突が起こるでしょう。神の最終的な訴えは、迫害、経済ボイコット、投獄、死刑判決にもかかわらず、キリストに忠実であれ、というものです。今週の研究は、私たちが地球最後の闘いを乗り越えられるようにするイエスの力を強調しています。

黙示録のメッセージは、不可解な象徴、珍しい獣、奇妙なイメージをはるかに超えています。黙示録は、愛に満ちた神が終末時代の世代にお与えになった永遠の真理について語っているのです。キリストとサタンとの闘いは、礼拝をめぐって天で始まり、礼拝をめぐって最後の山場を迎えます。

**問1 黙示録 14：7、9と4：11を比較してください。この善と悪の宇宙的な闘いにおける黙示録の包括的な主題は、何ですか。**

黙示録全体を通じて、礼拝と被造物は切り離せない関係にあります。黙示録14：7は、あらゆる被造物の主を礼拝するよう、私たちに呼びかけています。過去2世紀で世界を席卷した進化論を背景に、安息日は私たちのアイデンティティを永遠に思い出させるものです。それは、私たちが被造物であり、創造主が私たちの忠誠と礼拝にふさわしいお方であるという認識を常に強めます。悪魔が安息日を非常に嫌う理由の一つはこれです。

**問2 黙示録 12：17、14：12を読んでください。創造主への礼拝は、最終的にどのように表現されるのでしょうか。**

神の戒めを守ることによって創造主を礼拝することは、獣を礼拝することと真っ向から対立します。神は、歴史上最大の反対と最も激しい迫害にもかかわらず、ご自分に忠実な終末時代の民をお持ちになります。

「第四条の戒めに反して、国家の法律に従って偽りの安息日を守ることは、神に敵対する権力に忠誠を尽くすという表明であり、一方、神の戒めに従って真の安息日を守ることは、創造主に対する忠誠の証拠である」（『希望への光』1894ページ、『各時代の争闘』第38章）。

黙示録14：12は、救い主に献身的に従う人々は「イエスの信仰」を持つと述べています。「イエスの信仰」は、見えないときにも信頼するほど深い信仰のことです。それは、理解できないときに忍耐します。それは、私たちが信仰によって受け取るイエスからの贈り物であり、差し迫った争いを私たちが乗り越えられるようにするのです。

黙示録13章の獣の刻印の預言は、神に対するサタンの戦いの最も激しい、最悪の段階について述べています。イエスが十字架で亡くなられたときから、敵は、自分が敗北したことを知っていますが、できるだけ多くの人を道連れにしようとして心に決めています。この活動における第一の戦略は、惑わしです。惑わしがうまくいかない場合、サタンは力に訴えます。獣を拝むことを拒む者、または獣の刻印を受けることを拒む者は死刑に処されるという法令の背後にいるのは、結局のところサタンです。

言うまでもなく、宗教的迫害は今に始まったことではありません。カインが、神の命令に従ったとしてアベルを殺して以来、それはずっと続いています。イエスは、それが信者の間でも起こるだろうと言われました。

**問3 ヨハネ16:2、マタイ10:22、IIテモテ3:12、Iペトロ4:12 を読んでください。新約聖書の教会は、どんなことを経験しましたか。それはキリストの終末時代の教会に、どのように当てはまりますか。**

キリスト教史を通じて、迫害はよくありました。それは異教ローマでも起こりましたが、聖書を信じるクリスチャンに対する中世の教会による悪質な迫害が特に顕著なものでした。獣の刻印は、この地獄のような連鎖の最後の輪にすぎません。この迫害は、過去の迫害と同様、特定の信仰と承認された礼拝制度に従うことをすべての人に強制することを目的としています。

この預言は、迫害が経済制裁から始まることを示しています。刻印を受けないければ、誰も売買することができません。刻印を受けることを拒む者は、最終的に死刑判決を受けます（黙13:15、17）。

悪魔は、最後の試練が訪れたとき、クリスチャンと称する人々が獣の刻印を受けるように、彼らが人生の中で妥協することを促して、すでに準備を進めています。全世界が驚嘆しながら獣に服従しているように見えるとき（黙13:3）、突然場面が変わり、預言のカメラは神の民に焦点を合わせます。黙示録14:12は、次のように描写しています。「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たち」がいると。神の民は、敬虔で従順な生活を送っています。彼らは神の恵みによって、周囲のすべてが揺れ動く中でも、しっかりと立っています。世界が獣に従っている間、彼らは、「小羊の行くところへは、どこへでも従って行(き)」(黙14:4)ます。キリストの力によって、彼らは対抗する陰府の力に勝利します。

**問4 黙示録13:1、2を読んでください。この獣はどこから出て来ますか。誰がそれに権威を与えますか。**

黙示録は、竜をもっぱらサタンと見なしています。黙示録12:3～5によれば、竜は、「女が男の子を生んだ(ら)」すぐにその「男の子」を滅ぼそうとしました。のちに、その子は「神のもとへ、その玉座へ引き上げられ」ます。キリストを滅ぼそうとしたのは、異教ローマを通して働いた悪魔です(マタ2:16～18参照)。神と人間の敵であるサタンは、自分の目的を達成するために、政治や宗教の制度を通じて働きます。

この獣の力について、「竜はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた」(黙示13:2)と記されています。この預言は、数百年後、ローマ皇帝コンスタンティヌスが首都をローマから、現在のトルコにあるコンスタンティノープルと呼ばれるようになる場所へ移したときに正確に成就しました。これにより、かつての皇帝の玉座、帝都ローマに権力の空白が生まれました。このようにして、異教ローマはその獣に本拠地、つまり首都を与えたのです。

アイザック・バッカスは、次のように述べています。「帝国の本拠地をコンスタンティノープルに移すことで、……コンスタンティヌスは、ローマ司教が地上のあらゆる人間よりも、天の神よりも自分を上に置く道を開いた」(『信仰の従順と世からの分離の計り知れない重要性』16ページ、英文)。トマス・ホブズによれば、「教皇制とは、亡きローマ帝国の墓の上に王冠をかぶって座っている亡霊にほかならない」(『リヴァイアサン』386ページ、英文)のです。注意深く分析すると、黙示録13章の海の獣は、ローマから出て、世界的な礼拝制度になる背教的宗教勢力であることがわかります(黙13:3、4)。この獣は人間ではなく、神の言葉の真理を人間の法令に置き換えた宗教団体です。

黙示録13:1、6を読むと、獣の力を識別するために「冒瀆」というキーワードが用いられています。

聖書は、ヨハネ10:33とルカ5:21の二つの例で冒瀆を定義しています。(1)神であるふりをする、または神であると主張する人。(2)罪を赦す力があると主張する人。イエスは真の神であり、罪を赦す権利を持っておられたので、これらの告発は不当でした。ローマ教皇制には、聖書が冒瀆と呼ぶ二つの特徴的な教義があります。それは、司祭には罪を赦す力があるという主張と、教皇には地上における神の大権があるという主張です。

神の民は、獣を礼拝するよりも、神を礼拝することに最大の喜びを見いだします。彼らの従順は、愛の心から湧き出てくるものです。彼らが神に献身するのは、神が自分たちにどれほど献身的であるかを知っているからです。

**問5 黙示録13:5を読み、獣の正体がわかる特徴を空欄に書いてください。**

神は私たちに、預言の時間を理解するための鍵（預言の1日は文字どおりの1年に相当）を与えておられます（4課参照、民14:34、エゼ4:6）。黙示録13:5で言及されている42か月という期間を、ヘブライ暦に従ってひと月30日で計算すると、預言的には1260日、文字どおりには1260年に相当します。

教皇制は、西暦538年から1798年まで大きな影響力を行使しました。しかし、ナポレオンの将軍ベルティエが1798年に教皇を捕虜にしたとき、教皇の覇権という預言の期間は終わり、「捕らわれるべき者は、捕らわれて行く」（黙13:10）という黙示録の預言が成就しました。教皇制への打撃は極めて深刻でしたが、致命傷には至りませんでした。黙示録13:12によれば、致命的な傷は癒やされ、教皇制の影響力は再び世界中に及ぶことになるのです。

今日、世界の指導者たちは、ローマ教会の大使として教皇を歓迎し、また定期的にバチカンにいる彼を訪問しています。かつてない不安定な世界において、ローマ教皇が人々を団結させることのできる世界の道徳的指導者として高く評価される舞台が整いつつあります。2012年6月6日、ローマのサン・ピエトロ広場に集まった1万5000人以上の人々を前にした演説の中で、教皇ベネディクト16世はこう宣言しました。「日曜日は、主の日であり、男女の日であり、誰もが自由になれる日でなければなりません。日曜日を守ることで、私たちは人間の自由を守るのです」（公式サイトThe Holy Seeより）。

『各時代の犬争闘』は、この運動がいつの日か最終的にどこへ向かうのかを明らかにしています。「聖書の安息日をあがめる者は、法と秩序の敵であり、社会の道徳的抑制を破り、無政府と墮落とを引き起こし、神の裁きを地上に招く者である」といって攻撃される。……彼らは政府に対して忠誠を尽くさないといいて告発される。神の律法への義務を否定する牧師たちは、国家の権威に服従する義務は神によって定められたものであると講壇から主張する。立法府や裁判所においては、神の戒めを守る者たちについて虚偽の訴えがなされ、有罪の宣告が下される」（『希望への光』1887ページ、『各時代の犬争闘』第36章）。

**問6** 黙示録13:11~18を読んでください。この第二の獣は、黙示録13章の先の獣とどう違いますか。

先の獣は、海からあらわれましたが、第二の獣は、「地中から上って来」ます(黙13:11)。海は、「民族、群衆、国民、言葉の違う民」(同17:15)をあらわし、地は、世界の人口の少ない地域をあらわしています。この第二の獣は、先の獣が権威を行使する預言期間の終わり近くにあらわれます(同13:5)。つまり、西暦1798年頃に台頭するのです。

米国は、まさにこの説明に当てはまります。1776年に独立を宣言し、1789年に憲法を採択し、19世紀後半には世界の大国として認められました。

ヨハネは続けて、「この獣には、小羊に似た二本の角があって、竜のようにものを言っていた」(黙13:11)と述べています。聖書の預言における角は力を象徴しています。先の獣とは異なり、この獣の角には王冠がなく、君主制でないことを示唆しています。2本の角は、米国の力と成功の源である二つの主要な統治原則、すなわち政治的自由と宗教的自由をあらわしています。

**問7** 黙示録13:11、12を読んでください。この獣には、どんな変化が見られますか。また、それはどのように話しますか。

このおとなしく、小羊のような国は、最終的には竜のように話します。それは、「先の獣が持っていたすべての権力」(黙13:12)を振り、信教の自由の原則を放棄し、「地とそこに住む人々に……先の獣を拝ませ」(同13:12)るのです。米国は、教皇制の霊的かつ世俗的権威を認めることで、地上のすべての人に先の獣を礼拝するよう先導して要求するでしょう。この預言によれば、米国は獣の像——教会と国家の結合体——を造り、すべての人がこの像を拝むように要求します。

興味深いのは、この獣の勢力として最初に見なされた当時、米国はその後の軍事的、経済的大国には程遠く、現在も大国であり続けているということです。

今日の米国の政治的不安定について考えてください。いつの日か、それがどのようにこの預言の成就につながるのでしょうか。

参考資料として、『各時代の大争闘』第36章「差し迫った戦い」、第37章「ただ一つの防壁——聖書」を読んでください。

獣とその像を拝むことは、ダニエル3章を暗示しています。古代のバビロンも、現代のバビロンも、問題は礼拝です。

「神は決して意志や良心を強制されない。しかし、他の方法で誘惑できない者を自分の自由にしようとするサタンの常套手段<sup>じょうとう</sup>は、残酷な強制である。サタンは、脅迫と強制によって良心を支配し、自分に服従させようと努める。それを実現するためには、宗教と政治の当局を通じて働き、神の律法に反抗して人間の法律を強制するよう働きかける」（『希望への光』1887ページ、『各時代の大争闘』第36章）。

「彼らは目の前にある試練に耐えるためには、み言葉の中に示されている神のみこころを理解しなければならない。彼らは、神のご品性、統治、御目的について正しい理解を持ち、それに従って行動するときのみ、神をあがめることができる。聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、だれも最後の争闘に耐え抜くことはできない」（『希望への光』1888ページ、『各時代の大争闘』第37章）。

「しかし神はこの地上に、聖書、そしてただ聖書だけをすべての教理の基準、すべての改革の基礎として保持する一つの民を、お持ちになるであろう。学識者の意見、科学の推論、教会会議の定めた信条や決議（これらは、教会の数が多くてその主張も違うように、おびたしい数にのぼって内容も千差万別である）、大衆の声、——これらのうちの一つであれ全部であれ、それをもって信仰上の事柄に関する賛否の根拠と見なしてはならない。どんな教理や戒めでも、それを受け入れる前に、『主はこう言われる』という明白な事実をその裏づけとして要求すべきである」（『希望への光』1888ページ、『各時代の大争闘』第37章）。

### 話し合いのための質問

- ① 私たちは偽りを語る人騒がせな人になることなく、どうしたらキリストの到来を待ち望み、その希望を伝えながら生きることができるのでしょうか。
- ② 礼拝の問題について、じっくり考えてみてください。私たちの日常生活、日々決まって行うことは、私たちが誰を、あるいは何を礼拝しているかについて、どんなことを物語っていますか。